

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第92回

万葉の川心

元横浜市立子安小学校

教諭

澤井園子

泉川にして作れる歌一首

(巻第九 一六九五番歌)

妹が門 入り泉川の 常滑に

み雪残れり いまだ冬かも

冬の土手に出るには、しっかりと防寒とかなりの強い意志がいる。それでも、川沿いを散歩することにした。手の先も顔も凍る。澄んだ青空に川風が渡る。水をたたえて、川はとうとうと流れていく。少し自分の頭を整理しなかった。部屋でただ考えていても同じところを回るだけだ。あと少し、まだがんばれる、そういう自分への励ましも、少し脇に置きたかった。

「愛しい人の門に入り出る、泉川の清らかな岩に雪が残っている。まだ冬であろうかな。」入り「出ず」と泉川の「いず」が掛詞となり、地名を引き出している。常滑とは、川岸の水に濡れているところに、水苔がついて滑らかなになっているところのことである。曆の上では春なのだが、しぶきのかかる岩には溶け残る雪がある。清らかな川の流れと水苔と、真白な雪のコントラストを見つめながら季節を思う。「春の訪れにはもう少し時間が掛かりそうだ」とこの歌を詠んだのは、柿本人麻呂である。昔から山と川には神が宿ると信じられていた。季節ごとに姿を変え、圧倒的な力を見せ、時に人の心を包み込む。それを全身で感じ、言葉をつむいで歌にする。

人は苦しみの中にいる時、春を想う。厳しい冬のような現実から逃げたくなる。いつまで続くのか先が見えない中で、自分を守るためには逃



京都府木津市木津川橋から木津川上流を望む

げていい。休んでもいい。そして、また、この歌のように冬を味わうのもいいのではないかと思いつけている。人生で大変なことは、しばしば覆い被さるようになってくる。この大自然の前に、物事をうまくコントロールしようとか、思い通りに生きようというのとはとても難しい。実際無理なのだ。今更ながらに思う。だから、冬のまま、できることをひとつずつつけて味わう。無理なことは手放して、たった一つの大変なことを選んで、今この瞬間を味わう。過ぎた秋を悔やまず、来る春を恋わず、ただ冬にいる。自分にとつての冬もまた、限りある人生の大切な一瞬だ。詰め込んできたものを、少し引いてみるのもいいかもしれない。明日のことは明日に任せてみよう。「今」だけが確かに、目の前のここにある。

泉川は現在の木津川で、三重県および京都府を流れる淀川水系の支流である。写真は京都府木津川市にかかる木津川橋から上流を望んだものである。

来てよかった。でもやっぱり寒いのは応えるな…とつぶやいて、早々に川を後にすることにした。「まだまだ人生のひよつこが何を言うか」と笑われた気がした。誰に笑われたのだろう。振り返ると川はいつもそこにいる。



公益財団法人リバーフロント研究所

〒104-0033 東京都中央区新川1-17-24 NMF茅場町ビル7階

TEL.03-6228-3860 FAX.03-3523-0640

<https://www.rfc.or.jp>

2023年1月31日発行